

南明情報の日本伝来とその影響

年 旭*

The Southern Ming Intelligences Spread to Japan and Its Influence on East Asia

NIAN Xu

Lots of the Southern Ming intelligences are spread to Japan on the replace period between Ming and Qing dynasty in 17 century. Early spread intelligences about Hongguang and Longwu Regime are almost accorded with reality. Later spread intelligences about Lu Regent and Yongli Regime are jumbled, Lu Regent was confused with Yongli Emperor, and Zheng Cheng-gong was confused with his clansman Zheng Cai. These intelligence chaos leaded to the Japanese cognition chaos about Southern Ming until the early 18 century. On the other hand, Japan banned the trade with Nanjing merchants after obtained the intelligences about the destruction of Hongguang Regime, the raw silk which input by Nanjing merchants in the past was tried to obtain from Ryukyu and Holland. As the response, Nanjing merchants tried to change the trade object from Japan to Taiwan which was controlled by Holland at that time. From this, East Asian trade system was faced a new turn. After obtaining the destruction intelligences about Longwu Regime, Japan also considered to completely ban the china-japan trade, but Holland could not instead of the China's commodity export, either. Japan had to remove the trade ban, and the Qing-Japan trade also Subsequently started.

Keywords: Southern Ming, Japan, East Asia, Nagasaki, Zheng Cheng-gong

はじめに

明清交替の際に、中国の戦乱情報は漂流民・唐船・琉球使節・朝鮮通信使を通じて日本へ伝えられ、明清交替時期における日本の対中国政策を左右し、近世日本社会の中国認識にも影響した。これらの情報について、豊富な先行研究があるが¹⁾、弘光・隆武・魯監国・永曆を代表とする南明政権に関する情報

* 年旭：関西大学東アジア文化研究科博士後期課程、文化交渉専攻。

1) 明末清初に日本へ伝えられた中国情報について、浦廉一「華夷変態解題—唐船風説書の研究」(『華夷変態』上、東方書店、1981年)、1-78頁；板沢武雄『和蘭風説書の研究』(吉川弘文館、1974)；片桐一男『開かれた鎖国—長崎出島の人・物・情報』(講談社、1997年)；岩下哲典・真栄平房昭(編)『近世日本の海外情報』(岩石書院、1997)；紙屋敦之『江戸時代長崎來航中国船の情報分析』(2005年日本文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書)；松方

の整理と分析は、ただ日本乞師問題に関する研究の中に少し論及され²⁾、全体的研究がほぼ見られない。明末清初の際に、日本へ伝えられた南明情報は主にどのような情報があったのか。南明諸政権の交替情報の徳川幕府への伝来は、幕府の対外貿易政策、さらに近世中日貿易網にどのような影響を与えたのか。伝えられた南明情報によって近世日本社会は南明をどのように認識したのかとの問題について論述したい。

一、弘光・隆武政権情報の日本伝来

現存の日本に伝えられた最初の南明情報は『華夷変態』一に見る「李賊覆史軍門書」「崇禎賓天弘光登位」である³⁾。両書は日本の正保元年（1644）8月、南明の弘光元年に、長崎へ来航した明朝商人から長崎奉行に呈上した情報である⁴⁾。「李賊覆史軍門書」は李自成から史可法への声明の原文抄録であり、「崇禎賓天弘光登位」は「李賊覆史軍門書」の最後に附記し、「李賊覆史軍門書」の作成背景を説明した明朝商人の筆録である。後者の南明情報は次のようにある。

先帝崇禎十七載、勵精圖治、天稟英明、偶因流寇擾攘、勞積在躬、於舊年三月十八日、聞報犯境、觸爾賓天、即有南京兵部尚書史可法、同名部臣力扶新主、建號弘光。方年三十四許、誕辰七月十五天、諱由松、今用嵩字、避諱以行世、徙都南京、大登寶位、詔播天下⁵⁾。

情報は崇禎帝の賓天を潤色して、一揆の乱を解決するために崇禎帝は疲労が重なり病氣になり、崇禎17年（1644）3月18日に戦況の悪化を聞くと、突然「賓天」したとある。また史可法の補佐により即位した弘光帝の情報を記しているが、清軍の情報が見られない。

この南明情報を得た後、日本は極めて注視し、その後に多くの唐船に質問したが、当時の来日唐船は

冬子『オランダ風説書と近世日本』（東京大学出版会、2007年）；松浦章『海外情報からみる東アジア—唐船風説書の世界』（清文堂、2009年）；楊雲萍「南明時代與日本の關係」（『中国歴史学会史学集刊』1974年第6号、197-214頁）とある。

- 2) 日本乞師に関する先行研究は主に、小倉秀貫「徳川家光支那侵略の企図」（『史学雑誌』第二篇第十五号、1891、125-133頁）；稻葉岩吉「明末清初乞師日本始末」（『日本及日本人』第572号48-61頁、第574号46-58頁、1911）；中村久四郎「明末の日本乞師及乞資」（『史学雑誌』第廿六篇第5号1-25頁、第6号59-69頁、1915）；後藤肅堂「明末乞師孤忠張非文」（『史学雑誌』第廿六篇第八号、67-91頁、1915）；中村久四郎「明末の日本乞師補考」（『史学雑誌』第三十九篇第九号、901-903頁、1918）；辻善之助「徳川家光の支那侵略の雄図と国姓爺」（『増訂 海外交通史話』二五、東亜堂書房、1917、450-471頁）；石原道博「明末清初日本乞師の研究」（富山房、1945）；石原道博「朝鮮側よりみた明末の日本乞師について」（『朝鮮学報』1953年第4号、117-129頁）；小宮木代良「明末清初日本乞師」に対する家光政権の対応—正保3年1月12日付板倉重宗書状の検討を中心として」（『九州史学』1990年第5号、1-19頁）；南炳文「南明首次乞師日本将领之姓名考」（『史学月刊』2002年第1期、47-52頁）；劉曉東「南明士人日本乞師叙事中的倭寇记忆」（『歴史研究』2010年第5期、157-165頁）とある。
- 3) 『華夷変態』卷一、「李賊覆史軍門書」・「崇禎賓天弘光登位」（東方書店、1981）、3-5頁。
- 4) 『華夷変態』卷一、「崇禎賓天弘光登位」、5頁。
- 5) 『華夷変態』卷一、「崇禎賓天弘光登位」、4-5頁。

殆ど中国南部沿海からの船で、北京から遠く、情報も様々であった⁶⁾。長崎奉行はこれらの情報を整理した後、8月4日に「大明兵乱伝聞」として幕府へ呈上した⁷⁾。情報は今から見れば、最初の情報と異なり、李自成の興起・北京の陥落・清軍の入関を殆ど実情の通りに詳しく伝えられた。また南明に関する部分は、前の情報を補充して次のように崇禎帝の甥である弘光帝の出身、及び李自成の乱のため崇禎帝が封国である河南から南京に逃走し、南京の大内に擁立され即位した経緯を記している。

又今度御即位被成候帝王は福王と申、王之御子則先帝之御いとこにて御座候。惣而河南に住居被成候其所を、李自成打破り御両親共に討れさせ無御座候。只御一人猥学につれられ、南京之史軍門の所に落付被成候。四月廿二日、文武官人寄合相談致し、南京之城に彼福王之御子を移し奉り、五月十五日に御即位被成候而、年号を弘光と申候。御年は廿五六程と申候。南京之城より、金銀際限りなく出申候由候。其銀之銘に弘光と申号御座候由、承申候⁸⁾。

情報の最後に、長崎奉行はまた次のように、弘光皇帝の即位は暫時的であり、崇禎帝の皇子が北京から逃がれて、南京へ到着すれば、皇位を崇禎帝の皇子に渡すべきとの情報を補充した。これは後に伝えられた真偽三太子案の発生誘因である。

此弘光と申は、当年五月十五日、御即位候南京之年号にて御座候。乍去此福王被仰候は、重て崇禎之御子、何れにても御出有之ば、位を渡し可申間、先崇禎之年号にて置候へと、勅諭候由申候⁹⁾。

その後に長崎奉行は続いて来日した明朝商人から情報を収集し、正保2年（1645）6月にさらに詳細な明朝内乱情報を「大明兵乱伝聞」として幕府へ呈上した。この情報中には、前の南明情報を再び確認し総括した上、次のように、新しい情報とする弘光朝の滅亡・李自成勢力の敗北・真偽三太子事件、また清軍勢力の発展を伝えた。

一、崇禎皇帝は一揆に北京之城をせめをとされ、御自害被成候故、大明に国王依無御座候。則崇禎之いとこ福王と申候を、去年五月十三日に、南京にて南京之諸国司等御即位なし奉り、年号は弘光と号し申候。然處に今度南京之城洛却仕候様子は、韃靼人并吳三桂等李公子を追拂、北京・山西・山東・陝西を打取其威勢を以、今年四月より軍兵を南京之内揚州によせ、同中旬之比、揚州を攻落し、同五月九日に、揚子江を渡し申候…（中略）同十一日に則南京之王城を攻取候故、弘光皇帝の御行衛、知不申候、同廿四日に、韃靼人數百万にて南京を取申候由、國々風聞仕候故、南京之内蘇州・常州・松江之者共何も聞落仕城をあけのき候由に候、また浙江の内、加（嘉）興府へも、此閏

6)『華夷変態』卷一、「兵亂傳聞二通」、8頁。

7)『華夷変態』卷一、「兵亂傳聞二通」、5-8頁。

8)『華夷変態』卷一、「兵亂傳聞二通」、7頁。

9)『華夷変態』卷一、「兵亂傳聞二通」、8頁。

五月初に韃靼人よせ懸候へば、一戦仕候へ共、打まけ落申候。

一、崇禎皇帝之第三之太子を、ことし三月之比、吳三桂北京より南京に送り、御即位なし奉り候へと申遣候へ共、南京中之国司等、此太子を見知り不申、其上福王御即位によって其儘にて南京に御座候を、今度韃靼人并吳三桂等見付奉●御馳走申由に候、韃靼人之大将之名は、いわんと申候由に候。實否無御座候。

一、閏五月迄に、韃靼人打取候國は、大明三分一にて候と申候¹⁰⁾。

同年に幕府も対馬藩を通じて朝鮮側から断片的な明朝戦乱情報を得た。この時期の朝鮮は、1644年11月に人質として瀋陽で拘禁された昭顯太子から、「道路の流言（道路之言）」¹¹⁾という形式で南明に関する弘光帝の即位情報を初めて知り得た後、南明に対する関心が高まり、燕行使・漂流民を通じて多くの南明情報も獲得した¹²⁾。しかし、朝鮮に有意に隠蔽されたかどうかが分らないが、唐船風説の記録を見て幕府は朝鮮側から得た南明情報が少なく、僅か朝鮮と往来している対馬藩から清軍が吳三桂の助力によって明朝両京を打破ったという伝聞を獲得し¹³⁾、唐船による日本へ伝えられた南明情報と比べても新しい情報はなかった。

正保2年12月に、幕府は、使臣である隆武帝配下の参将林恩から水軍総兵官前軍都督府右都督崔芝の名義とする二通の乞師請求を受け取った¹⁴⁾。これは計16回の日本乞師の序幕を開くものであった¹⁵⁾。乞師書簡中には南明に関して次のように隆武帝の即位を述べた。

今我皇上神明天縱、乘龍御極、改元隆武、應運中興、親率六師、以蕩妖孽¹⁶⁾。

乞師書簡と共に、林恩が幕府側の尋問に応じて口上書も長崎奉行へ提出した。この口上書が後に乞師請求と共に幕府へ伝えられた¹⁷⁾。口上書の内容が『華夷変態』には記録されてないが、『朝鮮王朝実録』の中に以下のように少し残されている。これから、林恩が恐らく長崎奉行の尋問に応じて明朝国内の情勢、特に南明の局勢を述べたことがわかる。

10) 『華夷変態』卷一、「兵亂傳聞二通」、9-10頁。

11) 『朝鮮仁祖実録』卷四五、仁祖二十二年十一月丁亥。

12) 禹景燮「조선후기 지식인들의 南明王朝 인식」(『韓國文化』第61号、2013年)、133-154頁。

13) 『華夷変態』卷一、「兵亂傳聞二通」、10頁。

14) 『華夷変態』卷一、「崔芝請援兵」、13頁。

15) 中村久四郎「明末の日本乞師及乞資」、『史学雑誌』第廿六篇第5、6号、1915年。中村久四郎氏は直接乞師と間接乞師、また未実行の企画を加えて17回の統計数字を得た。しかし石原道博氏と南炳文氏との指摘により、第一回の崔芝と第二の周鶴芝は同人異名であるため、17回に足りない。他には重複の回数があるかどうかは充分に確認できないが、最多は16回と確認できる(石原道博『明末清初日本乞師の研究』正篇、「明將周鶴芝・馮京の日本乞師に就いて」(富山房、1945)、1-27頁; 南炳文「南明首次乞師日本將領之姓名考」、『史学月刊』、2002年第1期。)

16) 『華夷変態』卷一、「崔芝請援兵」、11頁。

17) 『華夷変態』卷一、「崔芝請援兵」、13頁。

日本正官平成統來言、大明送使、請甲兵五千來援、而日本於明朝素無相交之義、不肯出兵。其使言、北京・河南・南京・淮西一半・浙江一半清人有之。山東・河西・湖廣・貴州・四川・雲南・山西・陝西李自誠有之。大明只有福建・廣東・廣西云¹⁸⁾。

二通の書簡を通じて、幕府は南明隆武政権に関する情報を初めて知り得た。その後の正保3年（1646）正月に、林春齋は將軍である徳川家光の面前で書簡を読み上げ、家光の意を基に、老中の語気で日明交通の断絶を口実として乞師書簡を將軍へ呈上し難いとして、乞師を婉曲的に拒絶した¹⁹⁾。軍器の援助も日本の軍器の海外輸出禁止を理由として拒絶した²⁰⁾。

正保3年8月（1646、隆武2年）に、隆武帝の使者である黃徵明は、鄭芝龍の書簡を持ち、再び日本へ加勢を求めた²¹⁾。鄭芝龍の書簡は主に兵力を乞い、鄭芝龍の妻子の送還も請求し、南明政権に関する新たな情報は出て来なかつた²²⁾。この書簡を受けた幕府は内部で討議していたところに、同年10月に長崎に来航した唐船から次のように隆武政権の陥落に関する新たな南明情報を知り得た。

其趣ハ八月下旬韃靼人閩中へ攻カケ山賀関ヲ攻破ル、大明人不及戦而迎降ル、韃靼人延平ヘ攻入ル、唐王出奔江西之甘中、其后ハ自殺ス、或曰為韃被捕、八月廿八日鄭芝龍福州ヲ避テ、舟ニ乗テ、福州ヨリ三里サカリ、海上ニアリ、王孫文武官并芝龍ガ妻子、皆乘舟奔泉州、陸路ニハ一揆起テ濫妨スルユヘ、福州ノ落人皆舟ニ乗テ逃去、官人ハ不及申富民マデモ皆福州ヲ逃出ヅ、貧民バカリ福州ニ残リ留ル、韃人未入福州、而延平ヨリ九月二日三使ヲ以テ芝龍方へ遣シ、髮ヲソリ降参セバ、福建廣東江西三省ヲ芝龍ニアタヘ王トスベシ、云々。芝龍返事ニ髮ヲソラズ、我マ（マ）ニテソノママヲキ、三省ヲ領セシメバ、降人トナリテ、納貢スベシト、云々、三使其通ヲ韃酋へ告ベシトテ、延平ヘカヘルト、云々。

其後ノ伝説ニ、鄭芝龍韃人ニ被欺降參ス、日本ヨリ被遣芝龍ガ妻ハ自害ス、芝龍ヲバ約束ノ領地ヲモアタヘズ、北京ヘ遣シ禁獄ス、唐王モ生捕トナル、芝龍ガ子鄭彩餘兵ヲ聚メ福州ヲ取カヘシ、明帝ノ一族魯王ヲ迎テ監国セシメ、永曆ト改元ス、再興ノ志シアリ、魯王ノ命ニテ鄭彩二将相ノ高官ヲ授テ、建国公ニ封ズ、朱姓ヲ賜テ、朱成功ト称ス、依是毎年長崎ヘ渡ス商舶ヲ國姓爺ト号ス、俗人ハ鄭彩ヲ森官ト称ス、森官武事ニ達セリ、年々ニ国郡ヲ切取テ、勢漸強大ナリ。

或説ニ云、隆武二年十月改元永曆、当正保三年丙戌²³⁾。

この情報は隆武政権の陥落、及び前回の日本乞師の発起者である鄭芝龍の清への投降を記しており、隆武政権に続き永曆と改元した魯監国政権の建立、魯監国政権から賜姓を得た鄭芝龍の子すなわち鄭成

18)『朝鮮仁祖実録』卷四十七、仁祖二十四年正月甲戌。

19) 辻善之助『海外交通史話（増訂）』二五、「徳川家光の支那侵略の雄団と国姓爺」（東亜堂書房、1917）、450頁。

20)『華夷変態』卷一、「答長崎王談」、13頁。

21)『華夷変態』卷一、「鄭芝龍請援兵」、13頁。

22)『華夷変態』卷一、「鄭芝龍請援兵」、15-20頁。

23)『華夷変態』卷一、「芝龍敗軍」、24頁。

功の事も伝えられた。以前に日本へ伝えられた情報と比べて、これ以後の南明情報は混乱しており、魯監国が永曆帝と混同され、永曆が魯監国の年号と認識され、魯監国に冊封され建国公と喚ばれる鄭彩も鄭成功と混同された²⁴⁾。これは注意すべき点である。

一方でこの情報を得た家光は「福州が既に陥落したため、加勢も間に合わない」²⁵⁾という意を黄徵明に述べ、使者を帰国させた。ここで家光は出兵しようとしたが、ただ間に合わないという曖昧的な態度を示したため、「家光は恐らく出兵しようとした意図がある」との推論の一つ証拠になった²⁶⁾。しかし、小宮木代良の考証により、「武威」²⁷⁾によって国内外秩序を作り出した徳川幕府は、敗戦を招きやすくて武威を損害する恐れがある対外戦争に対し、実は消極的な態度を持ち、家光本人も恐らく出兵を支持しなかつたらしい²⁸⁾。しかし、家光はなぜ拒絶を直言しないで、かえって「間に合わない」という出兵しようとした曖昧な態度を表したのか、また最初の隆武乞師に対して家光もなぜ直接に拒絶しないで、かえつて老中の名義で返信し日明交通の断絶を口実として乞師書簡を將軍へ呈上し難いというよう個人回答を避けたのか。これがもっとも疑問とすべきことである。これに対し、先行研究によって当時に多くの浪人・武士や大名は対外戦争を通じて功績を得ようとする意欲が高まり、出兵の雰囲気も盛んになつた²⁹⁾。朝鮮へ行った日本使節も「大納言欲赴援南京。……大君、叔父二人曰宜假道朝鮮、出送援兵」³⁰⁾というように日本国内の出兵雰囲気を朝鮮へ報告した。このような強い出兵しようと言う雰囲気の中に、家光がもし明白に出兵を拒絶したら出兵主張者たちの不満を招きやすくなり、もし出兵して敗戦したら幕府の武威を損害しやすくなり、両難選択に落ちた。恐らくこの考慮の上に、家光は最初の隆武乞師に対して選択を避け老中の名義で返信し、隆武政権の滅亡を知った後すなわち選択の難題に直面する必要がない場合に、かえって出兵をしようとしたが、ただ間に合わないという出兵姿勢を表した。このように国内の出兵者たちを迎へし、幕府の武威も示した。家光は決断した後に、江戸周辺における武士・民衆たちの出兵評価を探偵したことあった³¹⁾。この探索行為も少なくとも家光の反応と国内の出兵雰囲気との関連関係を検証しえると言えろう³²⁾。

24) 『清史稿』卷二二四、「郑成功伝」(中国文史出版社、2003)、1329頁。

25) 『華夷変態』卷一、「芝龍敗軍」、24頁。原文には「福州既二敗レヌル上ハ、加勢ノ沙汰二不及ト、徵明ガ使者に申シ渡シ、進物共受納二不及、可令帰国と被仰出」とある。

26) 小倉秀貫「徳川家光支那侵略の企図」(『史学雑誌』第二篇第十五号、1891)、125-133頁。

27) 「武威」と日本型華夷秩序の関係について、朝尾直弘『將軍権力の創出』(岩波書店、1994)；山本博文「武威の構造－明清交替期の幕藩制国家」(『歴史評論』1995年総第539号)、18-34頁、と等がある。

28) 小宮木代良「明末清初日本乞師」に対する家光政権の対応—正保3年1月12日付板倉重宗書状の検討を中心として。

29) 小倉秀貫前掲論文、辻善之助前掲論文、小宮木代良前掲論文。

30) 『朝鮮仁祖実録』卷四十七、仁祖二十四年十一月辛亥、十二月甲午。

31) 『永井家文书』、「江戸幕府近习出头奉书」(『高槻市史』卷四、高槻市市役所、1974)、693頁。原文：今度大明より御加勢申請度由越候義、唐王・一官かんなと越申候事、其元京都などにて町人・牢人共如何取れた仕候哉、具ニ承可申上旨上意ニ御座候。

32) 小宮木代良前掲論文にも参照しえる。

二、弘光・隆武情報の日本伝来と近世中日貿易網のゆくえ

明末時期に、明朝南部の沿海地域からの密貿易商人が数多く長崎へ到着し、西洋商人と競争しながら、日本との貿易を行った。1637年の島原の乱後、徳川幕府のキリスト教禁止政策は特に厳しくなり、1639年にキリスト教の布教を支持するポルトガル船の来航禁止と相俟って、鎖国体制も確立した。その後、唐船の競争者はオランダ商人になった。明清交替時に、明朝の内乱に関する南明情報を唐船によって日本に伝えられた後、東アジア貿易に何らかの影響をもたらしたかについては充分に解明されていない。そこで以下に主要として唐商のライバルとなったオランダ側の史料を利用し述べたい。

東アジア貿易に従事する唐商は殆ど明朝南部の出身で、北京の陥落は東アジア貿易に大きな影響を与えたが、南京の陥落以降は、東アジア貿易網に大きな衝撃を与えた。正保2年（1645）に南京の陥落情報が日本に届くと、長崎に滞在していた南京船は極めて苦慮し、幕府に何度も督促されても、1646年6月まで帰航しなかった³³⁾。1646年6月に幕府の督促によって仕方なく出航したが、以下のオランダ記録により、多くの船は南京へ行かず福州等の南明地域に帰った。

昨年当地に到着した南京のジャンク船のうち一隻が出発した。前もって何度も知事たちによって出発を催促されていたが、国土全体を壊滅させたタルタリア人との戦争故に、今日までずっと引き延ばしてきたのである。…何人かは、南京ではなく漳州、福州、或いは中国の他の場所へ行くことを考えている³⁴⁾。

同月下旬に清軍に占領された南京から2隻の清朝商船が初めて長崎へ来航した³⁵⁾。この時期の南京唐船が既に次のように「韃靼」風になったため、日本に韃靼人すなわち清朝人と見なされた。そう言えば、この時期に来航した南京商船は清朝商船の初来航であったと言えよう。この方面で、日本がどのように韃靼風唐船を処置したかと言うことも近世の日清貿易網のゆくえに影響していた。韃靼風唐船の来航を聞いた後、長崎奉行は厳重に重視し、すぐ韃靼風唐船の来航を江戸へ報告した。7月に江戸から次のような緊急命令が下され、韃靼髪型に剃った唐人に対して交易を許さず、そのまま帰国させるように命令した。

同日、至急の飛脚が、昨晚江戸から当地に到着し、当地の知事充ての命令書をもたらしたことを知った。すなわち、最近南京から到着した二隻のシナ・ジャンク船は当地での取引を許されず、到着した時ままで、再び出発するように。何故なら、南京から来た人々は、タルタリア人に分類されるので、今後は中国人としてではなく、タルタリア人と見做されるが、日本はそれとは今まで全く貿易も文通もしてこなかつたし、特に、前述のタルタリア人がキリスト教徒なのか、或いは別の宗

33) 村上直次郎等訳『出島蘭館日誌』下巻（文明協会、1939年）、1646年6月8日、30頁。

34) 『オランダ商館長日記』1646年6月2日（『日本海外関係史料』第九冊）、164頁。

35) 『オランダ商館長日記』1646年6月17日、23日（『日本海外関係史料』第九冊）、165-166頁。

派なのか、当地では知られていないからである³⁶⁾。

幕府はなぜ清朝商人との貿易を禁止したのか、オランダ人は最初に「日本は韃靼人の貿易経験がなく、また韃靼人がキリスト教徒かどうかは分らない」と推測したが、その後にもっと詳しい情報を得て推測も更新し、「韃靼人商人の来航は日本の蒙古襲来の記憶を喚起し、清朝に対する警戒心が高まったため、清朝商人の長崎貿易を禁止した」³⁷⁾と記した。同年に明清交替の情報を知った幕府の反応から見れば、確かに清軍攻勢の迅速的な進攻が幕府の危惧を引き起こし、幕府は清軍の日本攻撃を危惧して沿海警備を強化した³⁸⁾。このように、清朝商人の長崎貿易禁止も警備の一環と言えよう。

南京商船の貿易禁止は当時の東アジア貿易網にどのような影響を与えたのか。これに関する注意すべきのは西暦1646年7月（日本正保3年6月）³⁹⁾に南京商船の貿易禁止を施行した同月に、幕府も薩摩藩に命じ、琉球を中継として南明からの生糸輸入を推進しようとするようにとの指示を出した。紙屋敦之は、幕府が明滅後福州の唐王政権との関係を積極的に追究しようとしたと解釈したが⁴⁰⁾、幕府はなぜ他の貿易品ではなく、単に「生糸」貿易を推進しようとしたのかということに注意されていない。以下の1646年1月から同年9月の長崎唐船の貿易統計によれば、恐らく1646年の南京船の貿易禁止との関係があろう。

表1 1646年1-9月長崎来航唐船と主要貿易品表

記録時間	船	主要貨物(担)	出典 ⁴¹⁾
1646年1月24日	南京船1隻	生糸250-300	138
1646年4月13日	福州船9隻	生糸34；砂糖1300；明礬200	159
1646年4月13日	南京船1隻	生糸250	159
1646年4月15日	福州船1隻	砂糖250	160
1646年4月20日	福州船2隻	生糸10；砂糖250；明礬200	161
1646年4月22日	漳州船2隻	砂糖320；明礬120	162
1646年4月30日	福州船1隻	砂糖500；生糸2	162
1646年6月17日	南京船1隻	生糸15000カッティー	165
1646年6月23日	南京船2隻	生糸280	166
1646年7月26日	漳州船2隻	砂糖1000	167
1646年7月29日	福州船1隻	生糸35；砂糖130	172
1646年8月1日	漳州船1隻	砂糖250；明礬120；生糸カッティー	173
1646年8月6日	福州を経由した南京船1隻	生糸25；砂糖70；明礬40	174

36) 『オランダ商館長日記』1646年7月27日（『日本海外関係史料』第九冊）、170頁。

37) 『オランダ商館長日記』1646年11月5日（東京大学史料編纂所（編）『日本海外関係史料』第十冊、東京大学出版会、2005）、13頁。

38) 紙屋敦之「明清交替と日本の対応」（『幕藩制国家の琉球支配』第三章第三節、校倉書房、1990）、94頁。

39) 当時の西暦紀年と干支紀年との間に、大体一ヶ月の時間差がある。（南明紀年と西暦紀年との対照表が司徒琳「中西日曆対照表」（『南明史』、上海古籍出版社、1992）323-337頁、と参照しえる）。

40) 紙屋敦之「幕藩制国家の成立と東アジア」、『歴史学研究』573（同著『幕藩制国家の琉球支配』、1990）

41) 『オランダ商館長日記』（『日本海外関係史料』第九冊）。

1646年 8月19日	広東船 1隻	茯苓100；砂糖100	178
1646年 8月28日	福州船 4隻	生糸54；砂糖300	180
1646年 8月29日	福州船 2隻	生糸37；砂糖340、明礬200	182
1646年 9月 3日	福州船 3隻	主に砂糖と麻布（数量不明）	186
1646年 9月 5日	泉州船 3隻	砂糖1200；明礬150	186

上記の表①を見れば、当時日本の生糸輸入は主に南京船に依存していた。これは恐らく南京が蘇州・杭州などの糸生産地と隣接したため、多くの生糸が日本へ輸出できたためであろう。幕府は南京船の貿易を禁止すると同時に、琉球を通じて中継的生糸貿易を拡大しようとしたことには、恐らく南京船の来航が停止した後の生糸の欠乏を解決しようとした意図があったろう。また、南京船の貿易禁止後に、他に生糸の欠乏を解決手段があったかどうかについて続いて検討する必要がある。

これに関して注意すべきは南京船の来航禁止令が下された後に、多くの南京船が貿易損失を防ごうとしたため、長崎海域に滞船し、そのまま帰航しなかった。また禁止令を知らない南京船も続いて長崎へ到着した。この状況に直面した幕府は1646年9月に、長崎に滞在していた南京船に対し、次のように、今回限りの交易を許し、再び渡来は禁ずるとの禁令を出した。これは清朝商船と幕府との初回貿易とも言える。

貿易を差止められた南京人は、今回だけ其の貨物を自由に販売することを許され、再び渡来することを禁ぜられた。但し支那人の風であれば従前通り渡航するを得るのである⁴²⁾。

なぜ幕府が清朝商船の貿易を臨時の許可したのか、南京船の帰航しないで長崎海域の長期滞留が不穩定の因素を招きやすいことは恐らくその一つ原因であろうが、以下のオランダ側との交渉を見れば、恐らく他に生糸方面の配慮もあったらしい。

平戸に住居があった時代には、一年に2000ピコルかそれ以上がもたらされていたのに、今や日本を八乃至一〇ピコルでなだめようとしているのである。その他の似たような言葉を挙げ、そして、日本に毎年こんなにも少ない生糸の輸入しかしないとは、我々の誠意だけが欠けているのだと。…我々は以下のように答えた。語られたことのすべては、ほんの少し或いは全く根拠がない。当地日本では充分知られていることだが、一方では中国の戦乱、もう一方では悪意ある一官がタイオワンへの物流を妨げ、同地で大資本と大きな利子を生む計り知れない損害を持ちつつ、取引できずに無為に過ごしている。従って、生糸の物流が乏しいことで、会社以上に損害を被ることになる者などない。そこで、そのこと（蘭船舶載生糸の減少）はほとんど問題になり得ない。何故なら、以前会社によつてもたらされた物は、今や中国人によって日本に来ており、従って、日本が会社によって便宜を得るか、中国人によって便宜を得るかで、ちょうど同じことである⁴³⁾。

42) 村上直次郎等訳『出島蘭館日誌』下巻、1646年9月10日、50頁。

43) 『オランダ商館長日記』1646年9月12日（『日本海外関係史料』第九冊）、194頁。

南京船の貿易禁止令が出された2日後に、幕府側のオランダ通詞は以上のようにオランダ商人に、現在の生糸の輸入量に対して不満を示し、もっと多くの生糸の輸入を希望した。幕府の要望に対してオランダ商人は、明朝内乱及び鄭芝龍の航路遮断のため台湾からの生糸の輸入がなくなったと説明し、日本へ輸入された生糸は唐商から輸入し得ると強調したため、双方は合意に達しなかった。すなわち幕府は琉球を通じて生糸の中継的貿易を増加しどうとしたと同時に、オランダにももっと多くの生糸輸入を要求した。ところが、この意図が全部達成しなかった。その事情には、南京船の臨時的な貿易許可の内に、この生糸の欠乏の考慮が恐らく存在したらしい。

幕府によって、渡日貿易が禁止された南京商人はどのように対応したのか。日本の貿易禁止に対して、次のオランダ記録により、南京商人は1646年9月に、密かに幕府側のオランダ通詞を避けてオランダ商人と直接交渉し、貿易対象を日本から台湾へ移してオランダとの直接貿易を進めようとの意図を持っていたようである。

今日通詞たちが知らないところで、まだ当地にいる南京の人々から密かに遣わされたある日本人と話をした。彼等が今後日本に通航することを拒絶された以上、オランダ人と連絡を取ることに気が進まないわけではないようであった、と。これは、私のもくろみと一致する。…一官によって阻まれたものを南京で簡単に手に入れられるかもしれない機会を、会社は今やきっと得るだろう。⁴⁴⁾

オランダ側はこの事件を、鄭芝龍の航路遮断の後に新たな商路を開く機会と考え、喜び同意した。オランダ側の承諾を得た後の南京商人は、同年の11月に、オランダ通詞と協議した上に通詞を保証人とする許可を得、オランダ通詞を伴ってオランダ商人を訪問し、以下のように台湾への渡航貿易の意図を述べ、また自由に台湾へ渡航するために渡航保証するオランダ国旗及び渡航免許状の交付を求めた。

午後、かつて南京人について一緒に話し合ったことがある商人がやって来て、相手方が約束したので、合意の上でだが、体裁上通詞たちとともに私に以下のことをしてもらえないだろうかと頼んだ。すなわち、南京人たちは今やタルタリア人となり、従って当地から追放され、タイオワンへ通航し、自由に彼等の貿易を邪魔や障害なく行なってもよいというしと保証として、旗や通航証を与えて欲しいと望んでいる。⁴⁵⁾

これに対してオランダ商人が同意した後、オランダ通詞は双方の交易意図及び通詞を貿易保証人とすることを長崎奉行に報告した。南京商船が貿易禁止令の影響で以後に長崎へ渡航できないため、長崎奉行も理解し、公証人のことを同意した⁴⁶⁾。この結果を知ったオランダ側は極めて喜び、国旗及び渡航免状も準備したが、同月9日に2隻の福州船と南京船が長崎へ到着し、隆武政権の滅亡、福州の陥落及び鄭

44) 『オランダ商館長日記』1646年9月27日（『日本海外関係史料』第九冊）、200頁。

45) 『オランダ商館長日記』1646年11月2日（『日本海外関係史料』第十冊）、9頁。

46) 『オランダ商館長日記』1646年11月5日（『日本海外関係史料』第十冊）、12頁；1646年11月6日、14頁。

芝龍の降服に関する南明情報を長崎へ伝え、局勢も一変した⁴⁷⁾。

この南明情報を得た長崎奉行は極めて緊張し、情報を江戸へ報告する一方⁴⁸⁾、12日に最初の意見を覆し、次のように、オランダ国旗及び渡航免許状の交付公証人には問題がないことを許さず、南京船が2日の間に帰航すべきこと、南京船と交易しようとしたオランダ船も当月15日内に出発すべきという命令を出した。

（知事は）交換を許可することを望まず、さらに今月の十五日に我々の船を送り出すように命令し、同様に中国人は明日か明後日に出発するように（命令した）。（私に）感じられたところによれば、タルタリア人は暴力で戸をこじ開けるように多少感じられ、（日本人は）恐らく恐怖に襲われて…⁴⁹⁾。

この命令を受けた南京商人は仕方なく、同日にある日本人を通じてオランダ商人へ長崎以外の海外での秘密交付を求めた。しかしオランダ商人は、万一この秘密交付が日本に知らせた後にオランダ・日本貿易に損害する可能性があるとのことを心配し、同意しなかった⁵⁰⁾。他方、オランダ商人は今後の清朝商人は日本との貿易ができないため、台湾との貿易を期待していた⁵¹⁾。それが実現すれば、近世中日貿易のゆくえも一変したであろう。ところが、双方の貿易は幕府の政策改変により、貫徹されなかった。オランダ商船は逆風のため⁵²⁾、長崎に滞在している12月28日に、突然江戸から以下のように幕府と清朝商人との貿易禁止政策が解除されたという情報を知った。

通詞の孫兵衛から、先日江戸から届いた以下の知らせを聞いた。すなわち、皇帝陛下は剃っているに対しても剃っていない中国人に対しても彼の国を再び開き、自由な貿易を許した。南京の人々を追放したのは、タルタリア人やタルタリア人に服従した者に関して、彼等の宗教について充分に情報を得ていなかったからである⁵³⁾。

この命令が、日本と清朝との貿易が開始される重要なシングルと言うべきである。しかしながら幕府が急に政策を変えたのかについて、この記録を記したオランダ商人は自分の経験を連想し、「幕府は韃靼人がキリスト教信仰者ではないと判明したため、貿易禁止令を解除した」と推測したが、実際は解明されなかった。ここで注意すべきなのは、同年8月に朝鮮からの経由で清朝に送還された日本漂流人が江戸へ上って幕府の問答を受けた。この問答を通じて、幕府は清朝の制度・軍事・風俗に関する認識も一層

47) 『オランダ商館長日記』1646年11月9日（『日本海外関係史料』第十冊）、16頁。

48) 『オランダ商館長日記』1646年11月10日（『日本海外関係史料』第十冊）、17頁。

49) 『オランダ商館長日記』1646年11月12日（『日本海外関係史料』第十冊）、22頁。

50) 『オランダ商館長日記』1646年11月12日（『日本海外関係史料』第十冊）、22頁。

51) 『オランダ商館長日記』1646年11月13日（『日本海外関係史料』第十冊）、23頁。

52) 『オランダ商館長日記』1646年11月13日（『日本海外関係史料』第十冊）、25頁。

53) 『オランダ商館長日記』1646年12月28日（『日本海外関係史料』第十冊）、39頁。

深くなった⁵⁴⁾。認識の深化は恐らく清朝に対する態度の変化の一つの原因であることは否定できないが、他のもっと重要な原因があるかどうかをさらに考查すべきである。これに関して長崎奉行は唐船が必ず2日の間に帰航すべき命令が下された後の第6日すなわち11月17日に、オランダ通詞に命じ、次のようにもし唐船との貿易が全部断絶したら、唐船の代りとするオランダは、唐船によって日本へ輸入される貿易品を、全部日本へ輸入できるかどうかとの交渉があった。

正午頃、通詞たちが知事のために来て、我々が持ち渡った商品すべてについてどこで仕入れたのかを書き留めた。つまり当地では中国人たちが日本にいなくても済ませることができないであろうか、という協議が行われようとしているのである。そこで、すべての商品は、バタフィアやオランダから豊富にもたらされる（であろう）と、しかし、そこで大げさに言い過ぎないように、彼等に告げさせたが、それに対して中国とオランダとではほとんど（の商品）を輸出する、と（日本側は）答える。⁵⁵⁾

この記録から、隆武政権の滅亡情報すなわち清朝が中国全般を殆ど支配した情報が日本へ伝えられた後、日本は以前に実行された貿易禁止令を貫徹し中国大陸との貿易を全面的に禁止しようとしたらしい。しかし、オランダは唐船によって輸入された貿易品を替えられないと答えた。恐らくこのため、漂流民を通じて清朝の国情を知った上に、日本は貿易品のためにやむを得ず前回の貿易禁令を否定し、清朝商人との貿易も解禁した。この貿易の開始と共に、以前に弘光政権の滅亡に動搖した中日貿易網も回復し始め、日清貿易もこれから徐々に進展することになる。

三、魯監国・永曆政権情報の日本伝来

慶安2年（1649、永曆3年）に、南明魯政権の鄭彩は使者である黃斌卿を派遣し、初めて魯監国の名号で日本へ乞師を求めた⁵⁶⁾。書簡の中には南明に関して次のように魯監国政権の建立と南明の局勢を述べた。

大明王ノ一門ウチツヅキツワモノヲコシ、荊シウ、豫シウ、両粵ナドイフ国々スデニトリカヘス、閩トイフ国と浙江トハ本藩ガリヤウブンナリ、大明ノ魯王馮翊テ、興・建・延・邵ナドイフミヤコ四ツ、県二十アマリヲウチトル、ツワモノ、ムカフトコロカタズトイコトナシ、大明ノシソン、方々ヨリヲコリテ、魯王ヲタツトビテ大シヤウトシ、アヒトモニガウリヨクス、イマモノガシラ千人、ニンジュ百萬アリ⁵⁷⁾。

54) 『韃靼漂流記（石井本）』（園田一亀『韃靼漂流記の研究』原書房、1980）。

55) 『オランダ商館長日記』1646年11月17日（『日本海外関係史料』第十冊）、26頁。

56) 『華夷變態』卷一、「鄭彩寄書二篇」、25-30頁。

57) 『華夷變態』卷一、「鄭彩寄書二篇」、26-27頁。

情報の中に、恐らく魯監国政権と永曆政権は南明正統性を争っていた影響を受けて魯監国政権に味方する鄭彩は、魯監国政権の強大を有意に誇ると同時に、広西・雲南・貴州を勢力範囲とする有力な永曆政権を意識的に隠蔽しようとした。同年、鄭成功も使者を送って乞師したが、乞師文書の中に南明政権に関する新たな情報がなかった⁵⁸⁾。

鄭彩と鄭成功との乞師の同年9月に、薩摩藩から四名の琉球朝貢使の口上書が幕府へ到着した⁵⁹⁾。この四名の琉球朝貢使は1646年に弘光政権へ向かう使節であり、明朝へ到着したと清軍に捕まられ、その後に鄭彩に救出されて琉球へ送還した⁶⁰⁾。帰国途中に送還船は暴風に遭って唐人と一緒に薩摩藩へ漂着した⁶¹⁾。薩摩藩がこれを知った後に、琉球使節へ明朝の状況を聞き、幕府へも報告した。四人の供述により、四人の駐在地が福州と違いため、ただ風聞によって「韃人の勢力が唐人より多い」⁶²⁾とのことを知り、他の合戦情報は殆ど知らなかつたが、永曆帝という人物が供述の中に初めて出てきた。

永曆皇帝より魯王御座候淀海と申所に、節節勅使被遣由候事⁶³⁾。

これを通じて幕府は、恐らく初めて永曆帝と魯監国とは別々の人物との情報を知り得た。情報を知った後、薩摩藩も使節の一名を呼び出し、関心ある問題について琉球人に質問し、問答の記録も幕府へ報告した。その中に南明に関して次のような問答が知られる。

一、福州の城責取候様歎之事

韃人福州之城へ押寄之由、大明人承候而、合戦不仕退申候に付、魯王も被退候由申候事。

一、隆武王御行末之事

如何様に被為成候哉不相知候と傳承候由申候事。

一、永曆皇帝は為何人之筋目に而候哉之事

桔王と申候而、廣東に御座候彼王子御子に而候、桔王は最子御果被成候由、國公被仰候、右に參候照屋牧志申候は、廣東は桂王被領候由申候間、字違申候、追尋申候へば唐音は桂之字は、通じ申候間、大明に而も書違有之由申候事。

一、魯王者何方に御座候哉之事

福州之内淀海より申候所に、船に御栖候、同所に小城御座候、城廻り日本路半里程御座候、乗船は拾六七端撮斗に見得申候由、國公之船はヲランダの船ほどに候由申候事⁶⁴⁾。

58)『華夷変態』卷一、「鄭彩寄書二篇」、29-30頁。

59)『華夷変態』卷一、「琉球伝聞」、34頁。

60) 真栄平房昭「近世琉球の対中国外交—明清動乱期を中心に」(『地方史研究』1985年第5号)、39-58頁。

61)『通航一覧』卷二百十、唐国部六(国書刊行会、1913年、第5冊)、372頁。

62)『華夷変態』卷一、「琉球伝聞」、30-31頁。

63)『華夷変態』卷一、「琉球伝聞」、31頁。

64)『華夷変態』卷一、「琉球伝聞」、32-33頁。

この質問から、幕府は清軍の状況のみならず、隆武・永曆・魯監国など諸政権の存続に対しても高い関心を持っていたと見られる。しかし琉球人の回答が混乱し、特に永曆帝のことについて、永曆帝が桂王と冊封されて廣東を領有し、或いは廣東が永曆帝の領地ではなく桂王の領地だと報告した噂もあった。薩摩藩は発音により、桂王を桔王と間違ったと疑い、明朝側の何かの誤字があるかどうかとも疑った。これを見れば、薩摩藩の情報を知り得た幕府も恐らく琉球朝貢使節から伝えられた永曆帝情報に対し、疑いがあつたらしい。

同時期に魯監国政権から琉球へ、軍資を琉球へ求めようとした四通の書簡も幕府へ伝えられた。その内の一通は魯監国の名義で書かれた国書であり、二通は鄭彩に書かれた咨文であり、一通は礼部尚書に書かれた咨文であった⁶⁵⁾。書簡の入手ルートは『華夷変態』の中に書かれていなかが、書簡の内容かれ見れば「その内の一人が病気になりゆえ、残りの四人を使節と一緒に送還した（其一人病、故四人即附貴使官帶歸）」⁶⁶⁾と琉球使節の救出経緯が記され、慶安2年に薩摩藩へ漂着した琉球朝貢使の経歴すなわち「建国公方へ参候内、一人は相果申候而、今度左右聞船には四人帰朝仕候」⁶⁷⁾と一致したため、書簡は薩摩藩へ漂着した琉球朝貢使節に持たれたことで、日本へ漂着した後に日本に獲得された書簡だったと推測できる。そうであるならば、書簡の作成時間は慶安2年或いは慶安2年以前であったと推測できる。また以下の「魯監国四年五月（魯監国肆年伍月）」を日付とする国書から見れば、漂流琉球人が恐らく魯監国4年前後に福建から出発したと見られよう。

本月初伍日、准禮科抄出該本部具題前事奉旨、琉球國差官修貢事竣、該部即發回文、令其歸國、該部知道、欽此⁶⁸⁾。

他方、琉球人が薩摩藩へ漂着した時間も恐らく魯監国4年すなわち慶安2年頃であろう。そうであれば、従来確定できない魯監国の建立時間は1646年であろうか⁶⁹⁾。また『華夷変態』は四通の書簡に「魯監国肆年伍月が慶安三年庚寅にあたる」とある。上記のように魯監国4年は慶安2年だと推定できるため、『華夷変態』の記録は恐らくミスしたのである。これはこの時期に琉球人から得た報告に関する問題点である。

上記の慶安2年の魯監国国書と鄭彩咨文の中に、南明に関する情報は次のことがあった。

移師七閩、勞苦張皇、子（于）今四年、幸周曆未改、漢德重光、黔滇二粵、正朔猶存、楚蜀江右、版章收服、薊國公臣吳三桂克復舊京、建國公鄭彩聿正南邦。予今親提六師、傳檄江淮、協齊威勢、

65) 『華夷變態』卷一、「魯王諭琉球」、35-44頁。

66) 『華夷變態』卷一、「自建国公寄琉球咨文」、40頁。

67) 『華夷變態』卷一、「琉球伝聞」、30頁。

68) 『華夷變態』卷一、「自建国公寄琉球咨文」、42頁。

69) 李崇智『中国历代年号考』、南明・魯王朱以海（中華書局、2001）、210頁。ここで魯監国元年は1646年あるいは1645年と確定できない。

底定金陵、方輿遐邇、觀厥成矣。⁷⁰⁾

慶國公陳邦傳恢復廣東豫國、金聲桓恢復江西、原都督吳三桂恢復北京、沐國公恢復雲南、其餘山東・南京・浙江等地、豪傑蜂起、不可勝數、大明疆宇、將指日全復矣。⁷¹⁾

1648年正月に清朝に帰順した元明朝將軍とする金声桓・王得仁は江西省で再び明朝の旗を揚げ、3月に同じ帰順人とする李成棟も清朝に叛して明朝へ帰した。この影響で長江以南における反清勢力も拡大し、南明勢力も一時恢復した⁷²⁾。上記の南明情報は恐らくこの時期の南明情報を描いていた。しかし、この時期に南明勢力を代表した永曆帝は元のように魯監国側の情報の中で隠蔽され、永曆帝の名義の下で取り戻された廣東・廣西・雲南などの地域も魯監国の勢力であったと叙述された。これは恐らく以前のように魯監国を南明代表政権として樹立しようとしたため、魯監国は国書の中に有意に永曆帝を隠蔽した。これも琉球人から伝えられた永曆帝に関する人物の情報と矛盾し、ある程度上に永曆帝に対して幕府の疑いを引き起こした可能がある。

次年（1650）2月に、長崎通事は唐船を通じて新しい情報を探偵し、幕府へ報告した⁷³⁾。その中に南明に関してただ次のように永曆王の所在を記録した。

一、大明國永曆王把守廣東廣西二省并雲南貴州、沐國公・魯王把守在舟山、其中將官名阮進・黃平西等⁷⁴⁾。

先の情報と比べてこの情報は永曆帝の様子を明白的に叙述し、永曆帝と魯監国とは別々の人物であり、西南地域を支配していた人物が魯監国ではなく永曆帝であったとある。前に魯監国・鄭彩側から得た情報の中の永曆帝像と正反対になった。この情報から1642年に大陸における南明政権の全滅に至るまで、幕府側は琉球側から伝達された南明の官方勅諭、また何回かの乞師請求も受けたが、唐船により伝えられた南明情報の更新は殆どなかった。それでは以上の情報、特に永曆帝をめぐる矛盾情報、及び鄭彩と鄭成功との混同情報に対し、幕府はどのように認識したのか、それも日本の南明認識にどのような影響を与えたのかを次に述べたい。

四、魯監国・永曆帝政権情報の日本伝来と日本の南明認識

南明情報が日本へ伝えられた後、情報翻訳を担当する人物は林春齋であった。『華夷變態』から、漢文の南明情報は全て林春齋によって將軍・老中の面前で解読された。情報の中継的機能を發揮した林春齋の南明認識は大きな意味で幕府の南明認識を代表し、明末清初の際の幕府の南明認識を左右した。林春

70) 『華夷變態』卷一、「魯王諭琉球」、35-36頁。

71) 『華夷變態』卷一、「魯王諭琉球」、37頁。

72) 顧誠『南明史』（光明日報出版社、2011）、327頁。

73) 『華夷變態』卷一、35頁。

74) 『華夷變態』卷一、35頁。

齋は南明をどのように認識したのか、特に混同された魯監国・永曆と鄭彩・鄭成功をどのように認識したのか。次の『華夷変態』序文から、林春齋の認識中に南明が代表できる政権は恐らく弘光・隆武・魯監国のみであった。

崇禎登天、弘光陷虜、唐魯纔保南隅、而韃虜橫行中原、是華變於夷之態也⁷⁵⁾。

序文が書かれたのは、永曆政権の滅亡年（1662）から既に12年を経ていた延寶二年（1674）6月8日であった⁷⁶⁾。この時に至るまで、林春齋の認識中に、南明の主要政権は主に「弘光・唐・魯」という三つの政権があり、最も長く存在していた永曆政権が全く南明主要政権として認められなかった。それでは永曆政権はどこにあったのか。初めて日本へ到着した魯監国政権及び永曆政権に関する情報は正保3年に唐船から伝えられた「明帝ノ一族魯王ヲ迎テ監國セシメ、永曆と改元ス、再興ノ志シアリ…或説ニ云、隆武二年十月改元永曆、当正保三年丙戌」⁷⁷⁾という情報であった。ここで魯監国と永曆帝とは混同され、魯監国の年号は永曆と書かれた。この影響を受け、慶安2年に魯監国の名号を記した乞師書簡が初めて日本へ到着した時に、書簡翻訳を担当する林春齋は次のようになぜ永曆年号を使わなかつたのかという疑惑を書簡の冒頭に書いている。

隆武己丑可疑、隆武改元者丙戌也、明帝丁亥隆武改為永曆、然則黃斌卿不用永曆年號、猶守隆武年號歟⁷⁸⁾。

ここで林春齋は魯監国の年号が永曆であると認識し、それゆえ魯監国の部下とした黃斌卿はなぜ永曆年号を使わなくて魯監国年号を使ったのか、隆武帝の忠心を表したのかとの疑問があった。実は魯監国政権の年号は確かに「魯監国」（1646～1653）であり⁷⁹⁾、このため書簡の最後に書いた年号は「魯監国三年十月十七日」⁸⁰⁾であった。永曆政権（1646～1662）は魯監国政権と同年に肇慶で成立された政権であった⁸¹⁾。林春齋は恐らく最初に日本へ伝えられた魯監国政権・永曆帝及び鄭彩・鄭成功の混同情報の影響を受けて、永曆を魯監国の年号として認識した。

そうであれば、その後に琉球人及び長崎通事から、永曆帝と魯監国とは別々の人物であったとの情報を獲得したことは、林春齋の南明認識に影響を与えたかどうか。これについて、林春齋が編纂した『華夷変態』の中の南明情報の分類方式から見て少なくとも分かれる。林春齋の分類の中に、弘光・隆武後の順列は永曆であり、魯監国の書簡が全部永曆年号に換算して分類し、慶安2年に魯監国政権の初回乞

75) 『華夷変態』序、1頁。

76) 石原道博『明末清初日本乞師の研究』、23頁。

77) 『華夷変態』卷一、「芝龍敗軍」、24頁。

78) 『華夷変態』卷一、「鄭彩寄書二篇」、25頁。

79) 『明史』卷一一六、「魯王檀伝」。

80) 『華夷変態』卷一、「鄭彩寄書二篇」、28頁。

81) 『明史』卷一二〇、「桂王常瀛伝」

師は永曆年号の起点と見なされた⁸²⁾。また序文の中に南明を代表した政権は「弘光、唐魯」（すなわち弘光政権の弘光帝・隆武政権の唐王・魯監國の魯王）と記した。以上から、恐らく琉球人からの情報混乱、また鄭彩と魯監国が永曆帝に対する隠蔽政策、と二因素の影響で、林春齋は琉球人と長崎通事から得た永曆情報に対して疑いがあり、続いて元のように魯監国の年号が永曆、魯監国と永曆が同じ人物であったと認識した。

しかし鄭成功が台湾を占領した後にも永曆の年号を使用し、永曆帝を奉ると宣言した。この永曆帝に対して林春齋はどのように認識したのか、鄭成功に対してどのように認識したのか。これに関して『林學士文集』に次のように書かれている。

韃虜掠華殆四十年、正史未見、則不詳真偽。然本朝升平西海、波穩德風、廣章福泉商舶淳至長崎、譯鞮通語、津司驛傳具達、故余輩竊有聞焉。…（中略）福州陷、芝龍為降虜、然其子森官、名彩、字成功、俗呼曰森官、尤奉明主、纔保南隅、賜國姓、號朱成功。…（中略）聞先是鄭氏亦奉一帝、建永曆之號、不知自今而後其事成而不變所守乎、有私營之謀乎⁸³⁾。

これは三藩の乱の時期に呉三桂の「称帝」情報を知り得た林春齋により書かれた記録である。林春齋は明朝崩壊の時から三藩の乱まで日本に伝えられた南明情報を追憶し、中略の部分に福王・唐王・魯王の事績を清軍への抵抗として高く賛美したが、永曆のことに関して、ただ鄭氏に奉じる皇帝と書き、また鄭氏が永曆年号を奉じて呉三桂のように自分のために活動したのか、或いは明王朝のために活動したのか、という疑念を提出した。このことから、林春齋は詳しく知った福王・唐王・魯王を正統の南明皇帝として承認し、情勢の分からぬ永曆帝に対し、鄭成功に自ら擁立された皇帝であろうかとも疑った。

林春齋の認識は大きく幕府の南明認識を代表したが、この認識は江戸時代の中日往来及び中国書籍の伝入に伴い、どのように変化したのかとのことが考察すべきである。これに関し、江戸前期に興起された鄭成功ブームの時期に作成された『国性爺忠義伝』から少なくとも見える。日本正徳5年（1715）11月に、鄭成功の事績によって創作された『国性爺合戦』という名作は、大坂で初演し、大成功を収めるに至っておおよそ17ヶ月間に連続上演した⁸⁴⁾。『国性爺合戦』の成功と伴い、鄭成功に関する劇の創作ブームも盛り上がった。その後の数年間に鄭成功を主題とする劇が多く出現し、享保2年（1717）に刊行された『姓國爺忠義伝』はその内の代表であった⁸⁵⁾。娯楽性を重視し南明諸政権に関して殆ど話しが及ばない『国性爺合戦』と比べ⁸⁶⁾、『国性爺忠義伝』は当時に日本へ伝えられた数種の南明史書によって創作

82) 『華夷変態』卷一、「芝龍敗軍」、25頁。

83) 林春齋『鶯峰先生林學士文集』卷四十八、「吳鄭論」、大阪大学図書館影写本。

84) 崔官「鄭成功から和藤内へ—近松の『国性爺合戦』を中心に—」（『東アジア文化交渉研究別冊』第8冊、2012）、107-112頁。

85) この時期に出来た鄭成功に関する作品は『国姓爺後日合戦』（1717）・『唐船嘶今国姓爺』（1717）・『傾城国姓爺』（1716）・『国姓爺御前軍談』（1716）・『国姓爺明朝太平記』（1717）などがある（石原道博『明末清初日本乞師の研究』第二章 鄭芝龍父子の日本乞師、注释第38、第75頁）

86) 『国性爺合戦』はただ最後の第五節の中に永曆帝のことを少し話したが、永曆帝と魯監国との関係について論説がな

されたが、史実を重視していて、『通俗二十一史』に収録され、その後に他の鄭成功に関する作品に時に引用されている⁸⁷⁾。それでは、当時の数種の中国史書によって創作された『国姓爺忠義伝』の中に、魯監国政権と永曆政権はどのように述べられたのか、また鄭成功と鄭彩とは区別されたのか。これらの問題に関し、『国姓爺忠義伝』の中に、魯監国名義の初回出現は「唐王即位福州」という節の中に、次のように隆武帝即位と同時に浙江省にも魯王という王が即位して監国王と宣言し、鄭芝龍が魯監国のことを聞いた後に連合して清軍へ抵抗しようと主張していると述べる。

此頃浙江の東におひて明朝の旧臣等神宗帝の御孫魯王を冊立て監国王となし、近日帝位に登し、奉つらんと計るよし聞り。鄭芝龍利害を奏して北征を止め、密に魯王と志を通ずると知られたり⁸⁸⁾。

永曆帝の初回出現は「国姓爺破廣東」という節の中に、次のように述べた。

明の神宗皇帝の嫡孫永明王と申す王子ましましける。其父桂王より以来衡陽に封せられ給ひしが、寇乱を避て梧州に寓し、父斃し給ひて永明王喪に籠り御座けるに、廣西の旧臣瞿式耜・王坤・陣子莊なんといへるもの冊立て監国王とす。国姓爺是を聞て廣西に來り、謹んでおけるは大王の國を監給ふは百姓の希所に、早く先帝遺勅に順ひ皇帝の位に登り、万民の望みに違き給ふ事なけれ。永明王宣に寡人未先帝の勅命を聞ず、卿是を詳に告に。国姓爺が曰、臣曾隆武の朝に仕へし、時帝常に曰く永明王は神宗の嫡孫朝家の正統に、朕に子なし、後将に永明王に属すべしと此詔り。内臣普く聞所なり。大王疑ひ給ふ事なけれ。爰におひて瞿式耜・王坤等ともに議りて、丁亥三月朔日肇慶府の官署を行宮と定め、永明王即位み給ひ元を永曆と改め、文武の百官定め給ふ⁸⁹⁾。

ここでは魯監国政権と永曆政権とは別々に述べられている。また、隆武帝の後に、永曆政権は隆武帝の継承人として描かれた。すなわち明清交替時期から三藩の乱に至るまで存在していた魯監国・永曆帝の混同認識は、清日貿易の開始と伴って多くの中国書籍の日本伝入により、漸次に明確されて認識された。また南明政権の代表序列も林春齋時代の弘光・隆武・魯王から弘光・隆武・永曆へ変化した。

これと類似したのは『国姓爺忠義伝』の中に、鄭彩と鄭成功とも区別され、鄭彩が鄭芝龍の族人として表現した⁹⁰⁾。ところが、注意すべきのは、『国姓爺忠義伝』は「国姓爺深智乞和兵」という節の中に、鄭成功が日本乞師の代表として述べ、また次のように個人評論も附けていた。

国姓爺の援兵を我日本に請ひけるは実事にて、松平紀伊守の臣松崎左吉の著はせし窓のすさみ拾遺

い（近松門左衛門『国姓爺合戦』、武蔵屋叢書閣、1891、61・68頁）。

87) 仓员正江「明清軍談国姓爺忠義伝」をめぐって（『国文学研究』第85号、1985）、48-58頁。

88) 西村富次郎（編）『国姓爺忠義伝』、唐王即位福州（自由閣、1886）、112頁。

89) 西村富次郎（編）『国姓爺忠義伝』、国姓爺破廣東、121-122頁。

90) 西村富次郎（編）『国姓爺忠義伝』、貝勒王定計捕鄭芝龍、119頁。

といへる書にたしかに載せたり。左に挙ぐ……⁹¹⁾

個人評論の中に書かれた『窓のすさみ拾遺』は、幕府儒陪とする松崎堯臣により、享保（1716-1736）年間に作成された見聞集であった。この見聞集により、南明の乞師に対して最初討議のところに、徳川家光は「本国の名折なれば、加勢遣はされなんとて、上意ありし時、各有無の御請なし難く見合せられし」⁹²⁾とのように、幕府の武威を損害しなければ出兵しようとの考えがあつたらしい。しかし老中たちの意見が統一できなかつたため、当日に出兵に関する討議がそのまま置かれた。次の日に再び討議したところに、家光は稻葉正勝の意見を受け、前の態度に反し、出兵しない方がよいと言つた⁹³⁾。この記録はある意見、家光が「武威」を損害する恐れがある対外戦争に対して出兵しようとするの推論を検証し得るが⁹⁴⁾、その一方で注意すべきは、出兵をめぐる激烈な討議が、正保3年の鄭芝龍乞師に対するものであつた。つまりこの時期の『窓のすさみ拾遺』の記録は、正保3年の鄭芝龍乞師に対する幕府討議を記した。しかし、元来の乞師主体は、『窓のすさみ拾遺』を引用した『国姓爺忠義伝』の中に、鄭芝龍から鄭成功へ移られて認識された。実際に乞師回数が多くない鄭成功もこのように日本乞師の代表として認識された。このような認識の形成は、近世前期に引き起こされた鄭成功ブームとの影響があるかどうかとは確定できないが、最初に伝えられた鄭成功・鄭彩の混同情報との関係も恐らくがあろう。鄭成功と鄭彩とは混同されたため、鄭彩の乞師を含む鄭成功的乞師回数も多くなり、乞師の主体にもなった。

その後、鄭成功的乞師主体の潜在意識は近代に至るまで恐らく存在していた。日清戦争以後に、台湾を得た日本は統治を安定しようとしたため、文化上に台湾と日本との緊密関係を強調した。この方面で、日本の血統があり日本へも乞師し、さらに日本と連合して清朝へ抵抗しようとした鄭成功は、もっとも重視された。鄭成功に関する多くの伝記及び研究も出版された⁹⁵⁾。諸研究の中に、鄭芝龍・鄭成功・鄭彩との乞師経緯が何回も考証され、特に乞師回数・順序などの問題が詳しく考証された⁹⁶⁾。この力が入った考証は、恐らく近世初期以後に形成された鄭成功的乞師主体の潜在意識を修正しどうとした目的があろう。

おわりに

明清交替時期に、唐船により多くの南明情報が日本に伝えられた。情報の中で最初の弘光政権に関する

91) 西村富次郎（編）『国姓爺忠義伝』、国姓爺深智乞和兵、154頁。

92) 松崎堯臣『窓のすさみ追加』、稻葉正勝国姓爺への加勢に反対す（有朋堂書店、1915）、255頁。

93) 松崎堯臣『窓のすさみ追加』、稻葉正勝国姓爺への加勢に反対す、255頁。

94) 小宮木代良前掲論文。

95) 丸山正彦『台湾開創鄭成功』（嵩山房、1895）はその序文（第5頁）の中に鄭成功伝記を作成する目的を次のように書いた。今や將軍が遺恨骨髓に透り、死しても猶忘れざりし清朝は、我が仁義の師に抗しかねてや、媾和修好の結局、善隣舊交畧整ひ、將軍が終焉の地たる台灣は、その生國大日本帝国の版圖に歸し、匪徒鎮定の期漸く近づきぬ、將軍の靈魂ハいか嬉しみ天翔り國翔つつ。

96) 例えは宮崎来城『鄭成功』（大学館、1903）；石原道博『明末清初日本乞師の研究』など。

る情報は事実に近く一番詳細なものであった。次の隆武政権に関する情報も比較に詳細的であったが、魯監国政権と永曆政権に関する情報が混乱し、真偽交雜し日本に伝えられた。この情報混乱のため、日本の南明認識も不足し、呉三桂の三藩の乱に至るまで南明という概念は幕府の中国事務代表者である林春齋にとって主要には「弘光・隆武・魯監国」政権という三つの政権であった。一番長く存続した永曆政権の情報が混乱し、また正統性をめぐって永曆政権と競争していた魯監国・鄭彩も人為的に永曆帝のことを隠蔽した。このため、日本は永曆政権に対して疑いがあつたらしい。永曆政権の詳細のことも殆ど知らなかった。また、林春齋の記録により、初めて日本へ伝えられた鄭成功・鄭彩の混同情報は、近世初期まで日本に影響していた。18世紀に引き起こされた鄭成功ブームのため鄭成功に関する作品が多く出て、鄭成功と鄭彩とも区別して認識されたが、本来に乞師主体ではない鄭成功もその後に日本乞師の主要代表として認識され、近代に至るまである程度上に存在していたらしい。

弘光政権の滅亡情報を得た初めに、幕府は従来の明日貿易を支持し、清朝商人との貿易に対して心配があり、南京からの韁靼風の清人貿易船との貿易を禁止した。しかし南京との貿易禁止のため、従来のように南京から大量に輸入される生糸もなくなった。幕府はオランダと琉球を通じて生糸を入手しようとしたが、台湾の航路が鄭芝龍に遮断されていたためオランダも協力しなかった。琉球の主要貿易相手が福州船であるため、恐らく効果も少なかつたろう。幕府が悩んでいた時期に隆武政権の滅亡情報が伝えられた。この情報を聞いた幕府は最初に續いて清朝との貿易を全般的に禁止し、唐船の代りとするオランダ人から貿易必要品を輸入しようとする案があったようだ。しかしオランダ人は唐船に取って代わられないと答えたため、清朝より帰国した漂流人から清朝への認識を深化した上、幕府はやむを得ず長崎奉行の緊張反応に反して、南明政権が滅亡した後に清朝との貿易禁止政策も堅持できないと判明し、清朝商人との貿易を解禁した。清日貿易もこれから始まった。この影響を受け、オランダが拠点を持つ台湾へ貿易しようとした清朝商人も長崎貿易へ回復し、近世中日貿易網も回復し始めた。